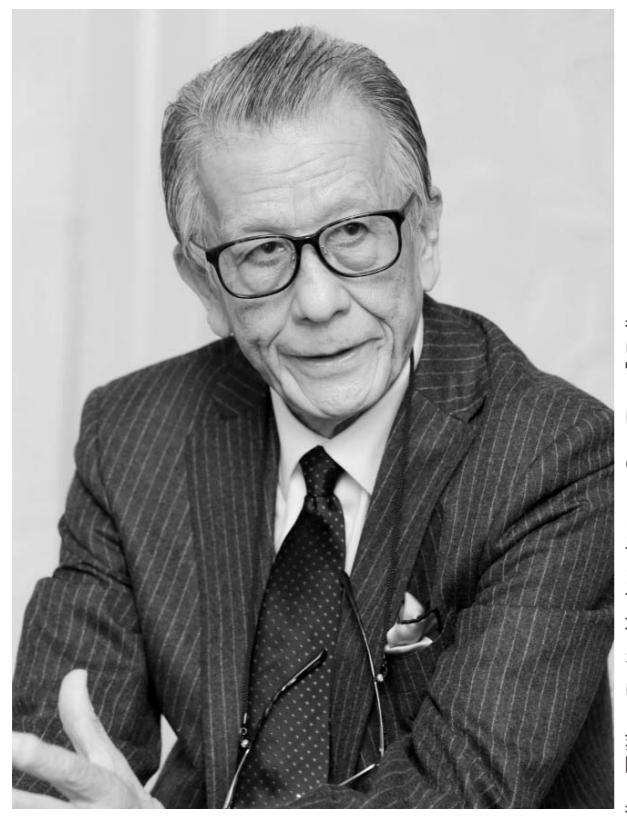


持続成長を可能にする企業の条件



ハルナグループ代表

青木 清志氏

青木 清志氏
(ハルナグループ代表)

北畠 隆生氏
(100年経営の会会長)

対談

創業100年以上の企業を中心に、情報発信などを実行する「100年経営の会」の北畠隆生会長と、1996年の創業以来、ペットボトル飲料分野で高成長を続け、株式公開を視野に入れるハルナグループの青木清志代表が対談。顧客志向による経営の重要性、ハルナグループが取り組む「水」についてのビジネスの可能性、日本のモノづくりのあり方など、話題は多岐にわたった。



100年経営の会会長

北畠 隆生氏

きたばた・たかお 東大法卒。72年通商産業省(現経済産業省)入省。官房長、経済産業政策局長を経て06年事務次官。08年退官。現在100年経営の会会長。兵庫県出身、63歳。

北畠 日本にはなかなか新しい産業が育たない、起業が少ないとかこれ30年ほど前から議論されています。失礼ながら青木代表は60歳を過ぎてから起業なさった。やはり特別な思いがおありだったのでしょうか。

青木 60歳という年齢を実感するこ

ともないくらい、体力がありました。

それがモッカくつでした。他人様が

されているのを垣間見た程度で、いま

は自分でやってみたいと思っていま

す。そうはいっても、なかなか

機会に恵まれないなかで、60になっ

てその機会が訪れたというのです。

私のモノづくりへの動機は60~70年

代にあります。当時の製造業は石油危

機を乗り切るために、いかにエネルギー

を使わないか、省力するかを考え

事に実現しました。私は、その時代を社

会人として体験することができたので

すが、当時の製造業の頑張りというの

が、その後もずっと頭に残っています

だと思います。英語に滞在していたの

時、たまたま水が湧き出している現場

に行きました。それを見て日本にはすばらしい水資源がありますが、

未長いビジネスもできています。大きな社会貢献にもなると思いました。

北畠 高度成長時代には海外にも日本企業が多くありました。何より日本国内で目標とした優れた企業のモチベーションが高まっています。英語に滞在していたの

時、たまたま水が湧き出している現場

</